

「教育者」型人格における宗教信念と実践の問題

——無適・橋田邦彦と『正法眼蔵』——

松 本 皓 一

一 はじめに

本稿は「教育者」型人格における宗教受容の問題を比較考察する筆者一連の事例研究の一環として、橋田邦彦（一八八二—一九四五）を取りあげたのであるが、本稿に先立って次の拙稿が発表済みであることを述べておきたい。

「橋田邦彦における行について」（「駒沢大学仏教学部論集」第二二号、一九九二）

「橋田邦彦と『正法眼蔵』」（『印度学仏教学研究』四〇巻二号一九九二）

前者は『行としての科学』を中心に、科学者橋田邦彦における宗教的実践信念の問題を論じ、後者はその形成に大きな影響を与えた『正法眼蔵』受容の問題を考察したものである。両者いずれも本篇の姉妹篇をなす。本篇はそれらを踏まえた上での論述であり、表記の題目としては、上記両論文が

構成上重要な内容にもなっている。重複は極力避けるとしても、論旨の展開上必要な部分、とくに前二論文において紙面の都合上省略せざるをえなかったところについての補足的記述等をも併せ論ずることを前もって諒解されたい。

さて本年（一九九一）は奇しくも太平洋戦争（具体的には日米開戦）から丁度半世紀となる。後述するように橋田は開戦時の東条内閣文相としての戦争責任を問われ、戦後自決した人物である。すぐれた生理学者であり教育者でもあったが、乞われて第二次近衛内閣に文相として入閣し、ひきつづいて戦時という非常事態にとらざるをえなかった一連の彼の教育刷新行政には、今日の平和な民主主義の時代からすると、殆んど肯定的評価をうるものはあるまいと言える。橋田は、あの時代の国家主義、極論すればミリタリズムの潮流にのった人物として、今日の社会的価値観からは否定されるであろう。少くとも今日ごく一部の人がびとを除いては、忘れられようとしている人物である。だがしかし、人間とその生きた時

「教育者」型人格における宗教信念と実践の問題（松本）

代とを考えると、果してそれだけでよいであろうか、というのが筆者の思いである。とは言え本稿は懐古的に橋田を再評価しようとするものではない。

人間は公人としても私人としても、常に一個の人間であるが、その公・私をともに厳しくあわせもつ橋田の人間像に、筆者は「教育者」型人格の特質を見る。そして、そこにおける『正法眼蔵』受容と、是非は別として、彼の信念的実践力との関連を明らかにしようとするのが本稿の目的である。

「教育者」型人格の特質については、「駒沢大学仏教学部研究紀要」四四号、全四七号において述べたので、それを参照して頂ければ幸甚である。

橋田の主著としては大要次のようなものがある。

彼の生理学の特色を知る専門学術書として『生理学要綱』初版一九二三、富倉書店。『物理化学大綱』一九三五、富倉書店。『稿本生理学大意』一九二九、富倉書店。『生理学小実験』（福田邦三氏と共著）一九三〇、富倉書店。『生理学』一九三五、岩波書店。『改訂生理学』一九三二、岩波全書。「生物の電気発生」（岩波講座生物学八巻の中）。『生体の全機性』（橋田邦彦選集）一九七一、東大医学部生理学同窓会編、協同医書出版。

とくに橋田の科学者としての宗教信念や『正法眼蔵』との関わり方を知る資料として、

『自然と人』一九三六、人文書院。『碧潭集』（山極二三氏

編）一九三四、岩波書店。『行としての科学』（山極編）一九三九、岩波書店。『空月集』（全）一九三六、岩波書店。『正法眼蔵釈意』（全四巻）、一九三九—一九四九、山喜房仏書林。『正法眼蔵の側面観』（杉靖三郎氏編）一九七〇、大法輪閣。

友人知己門下生などによる回想や座談会記事として、

「橋田無適先生の傍」（浦本政三郎）日本医事新報、一九四七年九月十一日号。「橋田邦彦先生を語る」（没後十年座談会）日本医事新報、一九五五年九月十日号。これらは『追憶の橋田邦彦』（東京大学医学部生理学同窓会編）一九七七、鷹書房。『橋田邦彦先生のおもかげ』（橋田邦彦先生遺徳顕彰会）一九六一、に他の多くの追憶文と共に収録されてある。なお前出の『側面観』にも杉氏による橋田の小伝が附録されており、また『おもかげ』には「橋田邦彦先生年譜」がある。

以下に述べる橋田の生活史や人物像には、右にあげた文献によるところが大きい。

二 橋田の人間像

(一) 生活史

橋田邦彦は明治十五年（一八八二）三月十五日、鳥取県倉吉町の医師藤田謙造の次男として生まれた。五才年長の兄として藤田敏彦（のち東北大学名誉教授、生理学・岩手医科大学学長）がおり、男二人の兄弟である。

一高校長時代『橋田邦彦先生のおもかげ』より

父の謙造は江戸の浅田宗伯（一八九四没）について漢法医学を修めた旧鳥取藩の藩医であったが、藤田敏彦の記すところによると明治十五年ごろ（吉村欣二によると橋田二才のころ）一家をあげて倉吉の堺町二丁目に移住、同研屋町で医を開業していた。謙造は漢学の素養がふかく多くの漢籍を蔵して、橋田の兄敏彦などは早くから四書の素讀をさせられたと述懐している。謙造には張仲景『傷寒論』についての著述もあると言われる。こうした漢学の家庭環境が後年橋田をして陽明学に接する一因ともなった。

橋田は地元の成徳尋常小学校（学齢期より一年早く入学）を経て明治二十五年十一才のとき、倉吉越中町久米村二郡高等小学校に入る。在学四年、明治二十九年鳥取県立尋常中学校（現鳥取西高等学校）に進み、当時から授業料免除の特典を与えられた秀才であったという。この間、同じ県内の東伯郡長

「教育者」型人格における宗教信念と実践の問題（松本）

瀬村の医師橋田浦蔵・琴夫妻の養子となり、生家の藤田から橋田へ改姓している。のち橋田は浦蔵の娘君恵と結婚するにいたるが、この養子縁組の一因には、生家の経済力が兄敏彦の学費だけで限界に達し、橋田の学資をみたすことができなかったことにあると推定される。養家はかなり財力があつたらしく、一時米子に移ったが、それを機に橋田も松江中学に転校した。しかし間もなく復帰、明治三十四年卒業と共に上京して第一高等学校第三部二組に入学した。一高第三部は当時帝国大学医科大学の予科に相当し、二組とは英語による受験組であったが入学試験の順位は二番であったという。明治四十一年東京帝国大学医学部を卒業、直ちに生理学教室に助手として残った。当時のスタッフは主任として我国生理学の鼻祖といわれる大澤謙二教授、永井潜助教授らがいた。橋田はこの下で約五年間電気生理学の研究実験に没頭するが、やがてドイツ留学が決定し、大正三年三十二才のとき渡欧した。兄藤田敏彦の回想によると、この頃の橋田は一時期精神的に悩んでいたというが、それが家庭的なものか、学問上のものか、或いは他の要因によるものか、定かではない。ただ養父が彼に家業の医師を継ぐことを期待していたこと、いまだ結婚前であったこと、又彼自身は医学より物理学志望の思いが強かったという点などを考えると、留学決定を前にして橋田の胸中は複雑であったと思われる。

しかしドイツ留学はこの心中の葛藤を、生理学をライフワークとする方向で明確化し清算した上でのことであろう。最初は、ストラスブルグ大学のギルデマイステルに師事したが、第一次大戦により日独が交戦状態に入ったため止むなくスイスにのがれ、チューリッヒのツァンゲル教授のもとで研究を続けた。帯独中は交戦国民として捕われの身となり苦勞をしたが、この間橋田は持参した王陽明の『伝習録』を耽読している。陽明学への打ち込みは後年まで続き、やがて『正法眼蔵』と出逢う機縁となった。

チューリッヒ大学では、蛙皮に関する電気生理学の実験に没頭し、「電位測定を五万回も繰り返した男」としてツァンゲル教授を驚嘆させたという。⁽²⁾

大正七年帰国と共に東京帝国大学医科大学助教授となり、全十年学位取得、十一年四十才で教授となり、生理学第二講座を担当した。この間に、全機としての生命現象を把握するべく道元禅師の『正法眼蔵』を参究する。

ひきつづき関東大震災後の仮住居の研究室で実験と教育に打ちこみ、かたはら教室員や有志を対象に、行と学一体の立場から『眼蔵』をはじめとする仏教書や陽明学の課外講義を活発に行なった。昭和初期の東京参玄会から始まって医道会、帝大仏教青年会、生機学談話会、碧潭会などがその主要な場となった。⁽³⁾

また音声学にも深い関心をもち、同志を集めて呼吸や発声などにつき研究会を開いた。

昭和四年北海道での生理学会総会が終った夜、浙潮・浦本政三郎（東京慈恵医大教授）の吹く尺八の音色に魅せられたのが縁で、自らも谷狂竹氏について習っている。橋田はピアノも好んだが、東洋的楽器の普及尺八を愛し、自決の前夜も心ゆくばかり吹奏したと伝えられている。⁽⁴⁾ 尺八は彼にとって生理学の「余外」であるが、また発声法研究と無縁ではなかった。

この間、大正十二年には自費にて欧文の雑誌 *The Journal of Biophysic* を刊行しているが、昭和五年ごろを回想した鈴木正夫によると「単に東大の学生ばかりでなく関係しておられるあらゆるそういう会合をとらへて精神的な人生観的なことを非常に力強く溢るように指導された」といい、それ以前（昭和二、三年ごろ）は「すべて電気生理学とか特別の電気生理学の基礎になるもの」で一つも精神的なものがなかったことを比較して、大正末から昭和初期は模索時代、あるいは生理学の基礎、生命の本質を求めている求道時代で、「多少はわかっていても現わさない。しかし或るところまでわかったら黙ってはおられない。あらゆる人に伝えたい」そういう時期、橋田とはそういう人であったことをのべている。しかし、この研究室や教室を中心に少くともその周辺サークルで個人

的に語られてきた彼の言動は、昭和十年代に入ると更に拡大され社会的国家的意味をもってくる。

昭和十二年、五十五才で第一高等学校長を拝命（東京大学教授兼任）、この頃より研究者教育者以上に教育行政者としての国家的責任が増大する。すでに橋田は昭和十年、和辻哲郎ら七名と共に文部省より思想視学委員を任命されているが、十二年の林銑十郎内閣（文相兼任）による日本文化講義要項の決定（四、三〇）、『国体の本義』刊行（五、三十一）、近衛内閣（文相安井英二）の教学局設置（七、二十一）など一連の文教政策の動きは、遂に昭和十五年七月、橋田を第二次近衛内閣の文相として入閣させることになった。

第一次近衛内閣は、昭和十三年一月中国に対し国民政府を相手にせずとの声明を発表し、更に同年四月国家総動員法を発令して日中戦争の深みに入りこんでいた。平沼・阿部・米内と続いた短命内閣をへて成立した第二次近衛内閣は、日中戦争の膠直化・ヨーロッパ戦局の変動・日米関係の緊迫化等の難局打開のため新体制運動の推進をはかり、東亜の新秩序と高度国防国家の建設を基本国策要綱として決めていた。この要綱は、組閣に先立つ二日前、首相・陸・海・外務の各大臣候補者の協議により国策としてすでに決定していたのである。

この近衛内閣に橋田は強く要請されて入閣し、その後も時勢のおもむくところ第三次近衛内閣を経て、対米英開戦の東

條内閣に留任する結果となった。橋田の秘書官として文部省入りをした弟子の内山孝一氏によると、留任の条件として「事務局は外交によって解決する。総理大臣も企画院も文部行政には干渉しない」との約束が、東條首相との間に取り交わされてあったからだという。

しかし東條首相との間に溝が生じ、昭和十八年四月文部大臣を辞したのちは、二度、教育文化使節として中国を訪れたこともあったが、新設の教学錬成所所長の職にあって終戦を迎えている。錬成所時代は鬱々として孤独であった様子を山極一三氏が記述している⁽⁵⁾。

昭和二十年九月十二日、戦時閣僚の一人として戦犯の指名を受け、十四日出頭の直前、荻窪の自宅にて服毒自殺した。行年六十三才。

橋田夫妻には子供はなかった。數徳院殿仁譽主一無適大居士の法名で、墓所は本郷蓬萊町浄心寺にある。

後年、同僚であった東竜太郎氏が「没後十年の座談会」で、一高校長に就任したことが橋田の一生を決定づけたと回想している。橋田の後任として一高校長となった安倍能成氏が戦後の民主社会に文部大臣として迎えられたことと比較すると、同じコースであるが時代が分った運命の明暗を思わずにはいられない⁽⁶⁾。

橋田が文相として在任した期間中の、主な文教行政は次の

とおりである。

昭和十五年（一九四〇）

中等学校教科書の指定制（九・一二）

高等師範学校専門学校教科書の認可制（十一・二六）

昭和十六年（一九四一）

資源科学諸学会連盟の発足（一・一六）

国民学校令公布。教科を国民科、理科、体錬化、芸能

化に統合。（昭和十九年より義務教育八年制）（三・一）

占領地への教員派遣決定（四・四）

科学技術新体制確立要綱の決定（五・二七）

『臣民の道』教学局発行（七・二二）

大学専門学校、実業学校の修業年限臨時短縮（十・一六）

昭和十七年（一九四二）

国民錬成所設立（一・二四）

東京帝国大学第二工学部新設（三・二五）

電波物理研究所設立（四・八）

戦時家庭指導要綱作成（五・七）

省内官制の改革（科学局設置）（十一・一）

昭和十八年（一九四三）

省内に民族研究所設立（一・一八）

中学校高等女学校実業学校の修業年限一年短縮四年制

（二・二二）。大学予科、高等学校高等科の修業年限一年短

縮二年制（一・二二）。

なお橋田の在任中、官立諸大学に併設された研究所として次のものがある。

東京大学東洋文化研究所、京都大学結核研究所、全工学研究所、東北大学選鉱製錬研究所、北海道大学低温科学研究所、九州大学流体工学研究所、東京商科大学東亜経済研究所、京城大学高地療養研究所、長崎医大東亜風土病研究所などである。⁽⁷⁾ここには、多分に時局の要望があるとはいえ、一連の「科学」重視の政策を見ることができ。

むろん、これらすべてが橋田自身の独創的起案の実施とは限らない。本来学究の徒である橋田が、官僚による行政機構の中で、しかも国策遂行という至上命令の下にあって、どれほど自らの意志を政策に投影できたかは疑問である。橋田が文相就任以前の昭和十二年五月、林（銑十郎）内閣（文相兼任）の時、国民精神作興のために『国体の本義』が刊行され、教育審議会が設置されるなど、のちの戦時教育体制へ教学刷新の道は引かれていた。戦局の重大化が、橋田をして更にこの道を拡大強化させ、急進せざるをえなかったことを見逃してはならない。

したがってここには、『国体の本義』及びこれと姉妹関係の『臣民の道』等に見られる神話的国家観の非合理性と、戦争遂行に必要な科学的合理主義とが折衷し交錯している。この

矛盾は、むしろ科学者であり同時に戦時下教育行政の最高責任者である橋田自身の葛藤相克を示すものではなからうか。

上来、橋田の生涯をその経歴を中心に見てきたが、次に私的側面としての人間像と、教育者としての特質にふれてみたい。

(二) 個性的特質

橋田邦彦の名を多少とも識る者にとっては、前述の戦時文相としての活動と悲劇的最後の一面のほかに、仏教的信念をもった謹厳硬骨の生理学者、特異な教育者というイメージがあるであろう。事実、橋田は『行としての科学』『碧潭録』をはじめとする一連の著作において、真の科学は、単なる理論的分析的認識のみでなく、実践的「行」によって完成される「道」でなければならないと主張し、異色ある人物として注目された。そして一部の人々には、それ以上に『正法眼蔵釈意』の著者として知られている。⁽⁸⁾

しかしそうした学究としての硬質な側面は別にして、多くの友人や門下生の回想するところからは、もっと人間的なものを混えた一面をうかがうことができる。

巷説であろうけれども橋田が泉鏡花の小説『日本橋』の作中人物(葛木晋三)のモデルに擬せられたことがある。⁽⁹⁾ むろん文学史上に考証されたことではなく橋田にとっては迷惑至極のことであつたろうが、彼は鏡花を愛読はしていた。つまり

自然科学系統の書物のみでなく、鏡花の作品をも読むような人間であるということに興味が惹かれる。

幼少のころはハーモニカを好んで吹いたというが、長じては特に尺八を愛した。生まれつき器用で創意工夫の才にめぐまれ、機械類を取り扱うことが得意であったというのは、後年、測定機器の操作をとまなう実験生理学を志したと縁でなかったとも言えよう。書もよくし、乞われると好んで陽明や道元禅師の語を書いた。

体軀は小柄でやや痩身であつた。口数は少く酒も余りたしなまなかつたが、麵類や蒲焼・天婦羅等は好物であつたという。比較的早くから銀髪となり、同僚から白狸・白頭翁とのニックネームをつけられたこともある。震災直後のブラック研究室では、昼休みに教室員や同僚と将棋や卓球にも興じた。卓球は実験台を利用しての間に合わせのものであり、食後の討論や課外講義も活発で、橋田をめぐる師弟関係には、学問研究の厳しさとは別に一種和やかな雰囲気があつた。⁽¹⁰⁾ 後になつてもそれを、橋田の人徳として敬慕する門下生は少くない。

しかし橋田の真骨頂は、あくまでも生理学者としての真摯な研究ときびしい後進の育成にあつた。

彼は生理学をもって、生命現象の機序を解明する純粹科学とし、方法としては物理学的手法によるが、これに化学的方法による生化学をあわせて生機学と称した。

すでに別稿で述べたことなので概述にとどめるが、生命活動という点について橋田は、自然科学を出発点とすれば機序論となるが、機序論が生活現象を目して物理化学的なものだけとするのは誤りであり、同時に生命論者が物理化学的に説明不可能なものがあるとの理由で生命論を主張するのも誤りとみる。つまり生活現象は自然現象の一部として物理化学的にも説明できるということに過ぎず、また今日の物理化学では説明できないところもあるというだけに過ぎないと言う。この両者の統合―生命のいとなみ（人生）の直接具体的把握こそ彼の公案であったが、この点について『正法眼蔵』との出逢いは、彼に決定的な影響を与えた。大正十年初期には、『眼蔵』との出逢いを通して一つの方向を掴んでいる。

たとえば「生」というごとき具体的事実には科学の構成原理は適用しがたいとし、「ここに学と術との区別があり、同時に学の力は人によることが明らかだ」と言っている。「人によること」つまり「修養を忘れない人」によると言う。修養とは彼のばあい具体的に『眼蔵』への参究であるが、それは学者の態度にかかわることであり、それと学者の専門とを混同してはならぬと言っている。⁽¹²⁾ 生理学者が生理学の立場にたって、生理学以外に或いは以上に、生命を取り扱っても少しも差しつかえないとする。専門は学であるが、態度は学を手段として学を超えたところの術であり、真の人の「人の

働き」である。学が脱落して始めて医学は医術となるのである。この「術」を「者」の中に融けこませているのが真の「医学者」であり、同時に真の「医者」であるとする。これらの点については、別稿で述べたこともあるので重複を避けたい。

しかしこうした信念は、医学部教授としての後進指導や研究室運営のうえに極めてユニークなものとして反映された。彼は教室を道場として捉え、学を行とし、科学者は「科学の行者である」として、自らも実験に際しては準備・実施・点検・格納・保管まで一切他人の手を借りることなく行じたと云う。「学道不二唯従自然」「行持道環」「即是道場」等々の言葉が、よく教場で橋田から学生に語られた。

昭和六年「俱学小訓」として教室員一同に示された心構えは次の通りであるが、一読して明らかのように『典座教訓』をよりどころとしており、いかに橋田が教室をもって学・術・道一致の実践の場としていたかが理解される。

凡ソ学ブトハ学術道三者ヲ一如タシムルコトナリ。能フ限リヲ観取シ、能フ限リヲ行取スベシ。観行ニヨリテ如実ノ相ヲ会取スル外ニ学ナキヲ知ル可シ。所謂大心ヲ保持スルモノ之ヲヨクス。身心ヲ以テ学ブヲ旨トシ、学アツテ他ナキヲ期スベシ。所謂老心ヲ保持スルモノ之ヲヨクス。常心ヲ道トシ、常事ヲ学トスルニ外ナラズ。コノトキ始メテ悠々自適常楽ナラン。俱ニ学ブコト

ヲ得ル所以ノ因縁ヲ省ミテ常ニ世恩ヲ深謝スベシ。所謂喜心ヲ保持スルモノ之ヲヨクス。自己ヲ忘レズ、日本人タルコトヲ忘レズ、又世界人タルコトヲ忘レザルナリ。

語ニ曰ク「作業作務ノ時節、喜心、老心、大心ヲ保持スベキナリ」ト。零細ノモノナリトモ粗末ニスベカラズ。公物ハ勿論私物ナリトモ各自ノ利用ヲ待ツ所以ヲ深く省ルベシ。又事物ヲシテ各其時処ヲ得セシム可シ。之ヲ取扱フニ慎重ナルベシ。語ニ曰ク「之ヲ護惜スルコト眼睛ノ如クセヨ」ト。又「高処ハ高平ニ低処ハ低平ニ」ト。俱ニ俱ニ学ブコトノ意義ニ切実ニ徹底シ、自利利他同時同事ナルコトノ体得ヲ勉メ、俱ニ敬愛スベク、争フベカラズ。自己他己一体ノ理ニ順フ所以ナリ。個々ノ条々モトヨリ之ニ尽キズ。又之ヲ尽サンコトハ能フ可キニアラス。ヨク三心ヲ保持シテ其ノ帰スル所ノ一心ナルヲ体得シ、凡テヲシテ自ラナラシメ、コノ小訓ヲ無用タラシム可キナリ。

昭和六年二月六日

無適識⁽¹⁴⁾

この「俱学小訓」は、いわゆる三心を尽くして学・術・道を一如たらしめることを本旨としているが、具体的には公私にわたり物を大切に扱うこと、互いに敬愛協調しあうこと、世間への感謝などが盛られてある。

橋田は禅宗という宗派に帰依している訳ではない。ただ永平道元の教えを尊び、これを教室即道場の理念として教育研究の場に取りこんだのである。医道会・碧潭会その他彼が関与したさまざまな企画は、この理念の実践に外ならない。

「教育者」型人格における宗教信念と実践の問題（松本）

大学とくに自然科学の領域では、真理の理論的実証的研究を至上とする一般的認識からすると、橋田の場合はきわめて異色なものであった。こうして橋田は単に科学者以上の科学者、門弟たちからは人生の教育者としての科学者、ときには思想家としての印象をもってその人間像が受けとめられている。

三 『正法眼蔵』受容の問題

(一) 受容の基盤と契機

表記の見出しによる内容は、既に本稿に先立って刊行予定の『橋田邦彦と正法眼蔵』（『印度学仏教学研究』四〇巻二号）に述べたところが多い。従って重複を避けたいので、詳しくは同拙論の併読を切望する。この節においては、さきに詳論できなかつた部分を補足することにした。

橋田に『正法眼蔵』受容の体制を用意させたものとして、二つの要因があげられる。

第一は生家の漢学的家庭環境から得た陽明学の影響である。橋田は格物致知の格物を分析的立場と見、それは「知を致す」実践（行）的立場の把握により総合的に完成されるとし、『大学』の格物致知は陽明の知行合一に外ならぬとした。この体験知、実践知の重視が『眼蔵』受容の一つの受皿となった。

第二は、電気生理学における厳密にして継続的な実験は、橋田に全身心を挙しての行としての意味をもっていたことである。

陽明学と科学実験とは一見相容れないようでありながら、体験知の尊重・行ということで共通し『眼蔵』受容の基盤となった。

陽明学と禅との関連はよく知られている。陽明自身も深く禅に関わりをもっていた。我国の著明な陽明学者安岡正篤にも道元禅師についての論考があり、橋田自身も忽滑谷快天『王陽明と禅』などは目を通してゐる。つまり橋田の場合は、まづ陽明学の知行合一から禅への接近が生じ、それが科学実験の行によって一層深く取り入れられるという二重契機があったと思われる。むろん背後には先述した生命現象の全機的把握という動因が働いてはいるのである。この全機的把握を目指す橋田の前に浮上してくるのが『眼蔵』であるが、これに伴う経豪の『御抄』写本が彼に与えた意味を考える必要がある。

(二) 『模写正法眼蔵御鈔来由』

七十五卷『正法眼蔵』を註解した経豪の『正法眼蔵抄』いわゆる『御抄』は、豊後泉福寺の開山堂に秘蔵されて閲覧筆写はすこぶる至難とされてきた。その困難さは面山瑞方『永平正法眼蔵豪註序』、万仞道坦『永平正法眼蔵秘鈔拜写序』、

慧輪玄亮『模写正法眼蔵御鈔来由』などにうかがうことができる。橋田は明治三十六年活字本として刊行された『御抄』上下二巻本を後に手にすることができたが、最初、『眼蔵』と共に東京大学図書館から借り出した『御抄』は、慧輪玄亮の前記『模写正法眼蔵御鈔来由』を前文として載せた写本である。その時期は、彼が東大で生理学を講義しはじめた大正七、八年ごろから同写本が震災で焼失する以前の間（最も可能性あるのはこの間の前半期）と考えられる。

いずれにしても橋田は慧輪の前文を一読し、非常な感動を覚えた。それを「拝見したとき実に感慨無量でありまして、今でもそれを思い出すと涙を禁ずることができないのであります」と記している。そして、後々のためにも、それを筆録し保存したのである。なにがそれほど彼を感動せしめたのか、慧輪の一文の概要を検討してみたい。

慧輪は万仞に隨身し、その会下にあつて『眼蔵』に参究していた。そこで抛りどころとされたのは万仞書写の『御抄』であったが、泉福寺秘蔵の真本と校合することが必須となった。慧輪は同参の祖天と共に豊後に赴き、苦心惨胆の末、真本を見ることに成功する。そして万仞の書写本に多数の脱字脱句重句を発見した。しかしそれも師万仞が日限に制約された困難な状況の中で書写した苦心の結果であり、脱字脱句のごときは「取捨」止むを得なかった「臨機の活手段」であつ

たことに思いを致すのである。慧輪もまた厳しい条件のなかで一時真本との校合を絶望せざるをえなかったが、偶然、別に永照寺蔵の写本『御抄』の存在を知り、「餓人の大主膳に遇う」の思いで同本の筆写許可を懇願する。なかなかその願いは聴き入れられなかった。しかし相手を繫縛して力づくでも志を遂げんと、ときには暴言をも発し、身命を賭しての熱意で説得した結果、遂に許可されて欠分を補い、新なる『模写本』を完成したというのである。その苦心と宿願貫徹の歎びとを慧輪は記録した。

前文の末尾に文化丁卯（註一八〇七）二月二十八日とあり、更に次のように、この『来由』執筆の心中を明かした一文を添えている。

前宝積慧輪老納当年六十又九。自念老朽而死時將至不遠。其能識_下取得_二此鈔_一之願末_上者唯我一人耳也。是以雖_下不文而且雜_二穢語_一可_レ愧者甚多_上焉。而所_二其經歷_一之以_二事實_一。聊記_二卷首_一。

老い先き短きを自覚した慧輪が『模写正法眼蔵古鈔』取得の来歴を敢えて後世に残そうとしたのであろう。そして更に文化戊辰（註一八〇八）五月二十八日『模写正法眼蔵古鈔』を麻布湖雲寺慧岳に伝えるに際して、次の偈⁽¹⁷⁾を添えた。

正法眼蔵当面開。無量珍宝積崔。

右方左界誰常主。信得及人受用来。

橋田邦彦が『正法眼蔵』参究に当り、手引き書として借り

「教育者一型人格における宗教信念と実践の問題（松本）」

出した『御抄』が慧輪の右来由の一文をのせた『模写正法眼蔵古鈔』の複写本であったことは重要である。橋田はこれを読んで、二人の僧（慧輪と祖天）がいかに原本筆写に苦心したか、その精進努力に実に「感歎の辞のない程感銘した」のである。

しかし、それほどまでに彼を感動せしめたのは、彼らのひたむきな筆写の「行」が、橋田のきびしい実験の「行」に共鳴しあったからである。仏道であれ学道であれ、共に「道」を学ぶということは橋田にとって「行」であることに外ならなかったからである。

橋田の『眼蔵』参究は、まづ、この『模写正法眼蔵古鈔』写本における感動をもって始められたことに注目しなければならぬ。そしてこの感動は、その後の『眼蔵』参究にも無縁ではあり得なかったと思われる。この点は後にふれたい。

（三）『眼蔵』の味得・体得

橋田は本格的に『眼蔵』参究に意をそそぐと共に、註解書や解説書を広く渉猟し、道元禅師の伝記等についても当時の宗外者としては稀有なほどの該博な知識をもち、その片々は後の主著『正法眼蔵釈意』や『正法眼蔵の側面観』などに随所に見ることができる。

彼は『側面観』のなかで、『眼蔵』を読む順序にふれ次のように述べている。

『正法眼蔵』の精髓は『七十五卷眼蔵』並びに『十二卷眼蔵』にあると信ずる。しかも『七十五卷眼蔵』には道元禪師の宗旨が示されており、『十二卷眼蔵』には宗風が示されていると考えられる。したがって道元禪師の宗旨を窺わんとするものは道元禪師が自身で定められたと思うべき『七十五卷本』の順序を追って拝読すべきであると信ずる。…中略…われわれは差し当り「研究」するよりは「味得」し「体得」することを目的とするものであるから、年代の順序には先ずかわらないのが至当であると考え⁽¹⁸⁾る。

右の文は昭和十一年九月の稿である。当然のことながら今日盛んに論議されている『十二卷本』をめぐる問題はいまだ提出されてはいない。

しかし橋田は、右の文中において新・旧二草の『眼蔵』にふれ、旧草『七十五卷本』は道元禪師の宗旨を示し、新草『十二卷本』は宗風を示しているとし（傍点筆者）、いずれも『正法眼蔵』として精髓であると言っている。「いずれも精髓である」ということは、「宗旨」と「宗風」がそれぞれの働きとして完全であり、同時に相互補完しあって完全であるということと両草の『眼蔵』ともに本質において全く等価であることに外ならない。

橋田が右に言うところが、直ちに今日の『十二卷本』をめぐる宗学上の論議のなかで、たとえば鏡島元隆博士が『七十

五卷本』をもって『正法眼蔵』の弘法篇（真実篇）とし、『十二卷本』を救世篇（方便篇）とされ、それぞれ独自の意味を認めつつその間に『正法眼蔵』として優劣なしとされていること⁽¹⁹⁾に対応するであろうか、ということも一つの課題である。宗学の専門外にある筆者にとって、これ以上教学の深みに入ることは避けねばならないが、ただこうした論議の推移を見まもりながら、たとえ橋田が今日の『十二卷本』をめぐる問題提起以前の存在としても、彼の眼蔵観を改めて考えることは必要だと思っている。

ところで橋田は、なぜ『眼蔵』は七十五卷本の配列順に従って読まれるべきだと言ったのであろうか。これには次の要因が考えられる。

(1)、まず彼が『御抄』を手引きに『眼蔵』へ入ったことであり、(2)、彼の人格が実践つまり「行」を中心とした構造上の特質をもっていたことである。

(1)について。山内（舜雄）教授が指摘されるように⁽²⁰⁾、詮慧や経豪にとって『十二卷本眼蔵』は、当時恐らく彼らの視界の外にあったと思われるから、『御聞書』や『御抄』が『七十五卷本眼蔵』の註解に終始したのは当然である。橋田が『眼蔵』参究のために先ず手引きとしたのは『御抄』であった。しかもその『御抄』模写の来由記（『模写正法眼蔵御抄来由』）によって大きな感動を受けたことは先に述べた。言うまでもな

く『七十五卷本』の順列にしたがう『御抄』は、「第一現成公案」から始まる。次の(2)において述べるような「現成公案」のもつ意味と、それまで『眼蔵』には全くの門外漢であった橋田にとって、伝統的宗学の基本手引き書として『御抄』がもつ権威と、加えて前述の感動体験が重なって、『七十五卷本』の第一よりとする『眼蔵』参究の方向と方法とが彼に定まったと思われる。

(2)について。この方向と方法は、単に『眼蔵』という外的価値から誘発されたというよりも、むしろ彼自身の実験・実践・行を重視する人格構造の特質から選択されたとも言える。

昭和十一年の仏教学会講演(於駒沢大学)の記録が『正法眼蔵の側面観』に収められてある。そのなかで橋田は、『七十五卷本』の「現成公案」第一には、世界は「行」として観られるべきだということが示されているとする。「行」とは観るもの自身が観られるものに没入することであり、観られるものが「行」として観られるようになったとき、真に世界が観えてくるという彼独自の観行一致が「現成公案」に示されているとする。⁽²¹⁾第二の「摩訶般若波羅蜜」は、第一の観方から観られたものとして何がそこに出てくるかを述べた第三「仏性」への、言わば橋渡しの働きとして捉えている。いかに学道すべきかを示した第四の「身心学道」と、行仏という

宗旨の根本問題の一つに関わる第六の「行仏威儀」との間に「即心是仏」(第五)の橋渡しの機能を指摘している。⁽²²⁾

このようにして、『眼蔵』七十五卷の各巻は夫々独自に完結し、表題の上からは無関係に並べられているようでありながら、内容的には同じ筋道が異なった言葉、異なった表現で反復述べられ、徐々に推移して変ってゆくと思たのである。つまり『眼蔵』七十五卷はすべて内容的には「現成公案」であるとも、科学者は先ずこれから入って七十五卷を順に読むべきとした。もし『御抄』との機縁がなく、最初から本山版の順によって「弁道話」に当たっていたら「私自身の問題が異なった方向に発展したであろう」とさえ言っている。⁽²³⁾

果してこの『七十五卷本眼蔵』に対する橋田の見解が、宗学上妥当するかどうかは不明である。恐らく近年における宗学研究の成果からみれば問題は多いと思う。しかし、宗学側から橋田に対し、批判や要求をすることは誤りであろう。何故なら橋田にとっての『眼蔵』とは、正に彼の学問に生命を与えるものであり、それがいわゆる道元禅師の『正法眼蔵』であろうとなかろうと、全く彼には関わりないことだからである。⁽²⁴⁾

(四) 宗教信念と実践

一般論として実践と関わりのない信念など有り得べからざることであるが、とくに「行」と深く関わって、「信」にし

ばしば伴い易い感性的側面を意志的実践で押さえているところに橋田の信念の特色がある。それらの詳細は別稿「無適・橋田邦彦における行について」で承知されたい。ここでは若干例の簡単な説明に留める。

(1)、『眼蔵』の色読。禅家ではおよそ祖録の類は心読体読をたてまえとするのが普通であるにもかかわらず、橋田は『眼蔵』の色読を主張する。色読とは文字を追っての参究である。その真意は、色読こそ文字を読む研究者の「行」であり、出家者の修行と本質的相異はないとの信念に発するものであった。それゆえにこそ『眼蔵』は「色読味到すべきもの」「味得・体得すべきもの」となりえるのである。

(2)、坐禅なき『眼蔵』参究。橋田はかつて参禅体験の有無と問われ、言下に「無い」と明言している。⁽²⁵⁾出家修行者の坐禅の意義は十分尊重しつつも在家の身としては必要なしとする。しかしその裏には、前項(1)とも関連して、生の全機的把握を目ざす科学者の学・術・道の実践がそのまま道元禅師の家訓につながるのと自負を看取することができる。

(3)、『眼蔵』の側面観。橋田は自らの『眼蔵』参究について、側面観、我観、私観等の前置きをつけている。しかしそれは宗学専門家への配慮であり、彼自身は科学研究者、教育者としての身心を賭した参究であって、正面観・全面観と何ら異ならぬと確信していた。その一端は『釈意』（第一巻）の

序文の一節「正法眼蔵に親しむこと爾来二十有余年生理学者としての体認を廻光返照して聊か〈生の全機〉と〈者〉の何たるかを識り、日本科学の根源を見出し得て無上の喜悦と感激とに溢れている」⁽²⁶⁾に明らかである。

(4)、自決。右に述べたところは橋田の信念の片々たる事例に過ぎない。宗教的信念は究極的なものとの関わりに立つ行動への決断として捉えられるであろう。しかし、ここで死を決断した橋田の行動を讃美したり貶したりする気は毛頭ない。彼のごとき人物の「自決」を、限られた紙面で述べることは到底不可能である。ここでは強靱な信念の例証として、その事実のみを取り上げる。彼の遺書は、⁽²⁷⁾第一に、「輔弼ノ大任ヲ拝シナガラ其責ヲ得ザリシコト」を天皇に詫び、次に「道義ノタメニ戦フト称ヘナガラ義ノタメニ国ヲ賭スル迄戦フコトヲ得ザリシヲ」盟邦各国に謝し、「生キ永ラヘテ務ヲ果シ得ザルコトハ苦中ノ苦ナレドモコノ苦ヲ忍ビテ義ニ赴ク」とある。辞世は「いくそたび生れ生れて日の本の学びの道を護り立てなむ」ほか一首である。遺書の末尾に「我は我の信念に従ふのみ」とあって、自らの信念に従い自決を実行した。戦時閣僚という公人としてのこの遺書が国体や道義についての旧価値観に立つことは言う迄もないが、その背後には私人橋田邦彦のさまざまな思いが錯綜したに違いない。しかし彼は死に臨んで一切それを口外しなかった。

個人的には優れた科学者・良き教育者であった彼が、戦時の文相として戦場へ学徒を送り出さねばならなかった苦悩も「輔弼ノ責任」と「道義」のかげに秘して、服毒したのである。生前「随流去」の語を愛したが、信念をもって時勢と共に流れ去った。正にタテマエに殉じた生涯であった。

時間と紙数の制約のため遺憾ながら十分な記述ができなかった。冒頭のべたように別稿二論文を併せて本稿は一応の体裁を為すが、更に同時に近刊予定の拙稿として「橋田邦彦における医の学・術・道」（小野泰博氏追悼論文集所収、ノンブル社）がある。重ねてこれらの併読をお願いできれば、一層のご理解が得られると思う。

注

- (1) 『橋田邦彦のおもかげ』（以下『おもかげ』）一〇頁
- (2) 『正法眼蔵の側面観』（以下『側面観』）二八九頁
留学中のことは『追憶の橋田邦彦』（以下『追憶』）四六頁以下。
- (3) 東京参玄会。大正十年頃、緒方知三郎氏らを中心に東大病理学教室関係者が間宮英宗師を招いて始めたものの。のち生理学教室のある医学部一号館に移り、橋田はしばしば前座をつとめて講話をした。昭和三十七年のものは『碧潭集』に収録されている。『追憶』一七頁
医道会は昭和五年頃、医学部学生有志が橋田を中心にもった会。仏教青年会の診療所（本郷三丁目）で健康相談をするものもあった。橋田も仏青に関係し、当時のメンバーには、後「教育者」型人格における宗教信念と実践の問題（松本）

- (4) に『正法眼蔵抄意』十巻。（山喜房仏書林）を刊行した畑邦吉氏などあり、橋田の感化の深さを思わせる
全前六九頁、二二三～四頁。
- (5) 山極一三氏「最後の一年半」（『おもかげ』三四頁）
安倍能成氏による橋田批判があったことは『追憶』一八四頁、二一四頁。
- (6) 但し官立大学に勅令による研究所設立は、橋田の文相就任前からあった。

- (7) 『正法眼蔵釈意』は実兄藤田敏彦氏によると、最初全十二巻で完結の予定であった。（『おもかげ』一三頁）

- (8) 『追憶』七一頁
以上『追憶』収録諸氏の資料による。

- (9) 拙稿『橋田邦彦と正法眼蔵』

- (10) 『碧潭集』三〇一頁

- (11) 拙稿「無適・橋田邦彦における行について」

- (12) 『おもかげ』二七〇頁。若林勲氏の回想「片影隻語」の中に橋田は自ら定めた「俱学小訓」を卒先実践し、資材を大切に活用した例があげられている。「俱学小訓」のほかに橋田は「医道無為、唯従自然、尽無不為、唯命俟天」の偈を残している。杉靖三郎氏はこれを医学の「信心銘」に比している。

- (13) また別に橋田篤氏に与えた「医道訓」には「…学術道三者渾然トシテ一ニ帰スルハ仏性ノ現前ナリ、之ヲ努メヨ」とある。『追憶』二七二頁。

- (14) 『正法眼蔵註解新集』永久岳水篇、一九七九、復刻版、四〇二頁。『正法眼蔵蒐書大成』二二巻、八一〇頁。

- (15) 『自然と人』二九九頁。『側面観』一一〇頁
偈文の語に『註解新集』と『蒐書大成』本との間に若干の相異あり、『大成』本により訂正す。

- (16) 右方左界誰常住——右方左界誰常主
『側面観』四〇頁

- (19) 『十二巻本「正法眼蔵」の諸問題』大蔵出版、一九九一、二二頁以下。
 - (20) 全前二五二～三頁
 - (21) 『側面観』一一九頁以下
 - (22) 『側面観』一二三頁以下
 - (23) 全前
 - (24) 全前 一二二頁
 - (25) 『空月集』四一二頁
 - (26) 『正法眼蔵釈意』第一巻、一九三九、序
 - (27) 『追憶』一三一～一四頁。もう一つの辞世「大君の御楯ならねど国のため死にゆく今日はよき日なりけり」。別に杉靖三郎氏宛遺書あり。『おもかげ』一七六頁。同遺書に「数十年の精進も尚未だ実を結ばず、時世の然らしむる所とはいへ、力足らず今日に至れること遺憾千万、深く省察すれば其任にあらずして事に当りし事、慚愧に不堪候。前途極めて遼遠なれど、道のため一層の御精進願上候。濫りに才を露さず、春風裡に万華を生々たらしむると同時に、冥者として其根基を培ひよく実らしめて新しき種子を養成すること、極めて肝要と存じ候云々」とある。
- 敗戦の渦中であって日本の復興を後進の科学者育成に期待していたことが判る。